

イノベーション・マネジメント研究センター

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】(参考)

イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動は活発に行われている。研究・教育活動実績では、18の研究プロジェクトがあり、2018年度は複数回のシンポジウム、セミナー、公開講座を開催した。対外発表では、学術雑誌1冊、研究叢書2冊、ワーキングペーパー13編を発行した。外部資金の獲得状況は、2019年度科研費の獲得35件、民間企業からの受託研究2件がある。

2018年度の重点目標「研究プロジェクトの推進と研究成果の公開」について、オンラインジャーナルへの登載という新しい取り組みも含め、目標を達成したことは評価できる。しかし、「社会貢献・社会連携」の資料収集・目録データの作成(B評価)は、システム移行が原因で、達成指標の1000件に対し598件に留まった。システムの移行作業は完了したことなので、今後は資料収集・目録データの完了に向けた取り組みが期待される。

2019年度中期・年度目標は、適切に設定されている。重点目標は、「研究プロジェクト推進と研究成果の公開」が継続される。叢書、学術雑誌、ワーキングペーパーの発刊、シンポジウム、公開講座の開催等により、質と量の向上が期待される。

なお、研究所(センター)の質向上のため、内部に質保証委員会を設置したり、外部評価により研究活動等の客観的評価を行う仕組みを取り入れている研究所も一部見受けられる。運営委員会により適正な運営がなされているとのことではあるが、他研究所の取り組みなども参考にしつつ、質保証に向けたさらなる取り組みを期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

当センターの活動について、十分に評価して頂いている。資料収集・目録データ構築については、当センターとしての資料収集・保存方針を検討しながら進めていく必要があるが、登録するものについては直ちに実施したい。質保証については、運営委員会により適切な運営がされていると考えているが、さらなる取り組みとして所員懇談会を実施している。引き続き適切で活発な研究活動が行われるよう、他研究所の取り組みなども参考にしつつ運営していく。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況について、幅広い分野の見解の共有、成果の社会的還元が適切に行われている。資料・目録データ構築(作成)については、資料収集・保存方針を検討しながら進めていただき、登録が必要なものについては速やかな実施を期待したい。また、内部質保証については、これまでの運営委員会による適切な運営に加えて、所員懇談会を実施しているが、今後は、他の研究所の取り組みなども参加にしつつ、更なる取り組みが期待される。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2020年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2019年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2019年度に研究所(センター)として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

1. 研究プロジェクト

- ①「企業家史研究会」 長谷川 直哉
- ②「日仏労働市場の比較」 奥西 好夫
- ③「新興国企業の国際化」 安藤 直紀
- ④「地理的表示研究会」 木村 純子
- ⑤「保険におけるフィンテック」 浦谷 規
- ⑥「起業家教育プログラム研究会」 田路 則子
- ⑦「ロジスティクス・クラスター研究会」 李 瑞雪
- ⑧「ブランド・コミュニティ研究会」 竹内 淑恵
- ⑨「機能横断型チームの形成史：トヨタ自動車を対象に」 梅崎 修

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ⑩ 「スポーツビジネスと社会的アイデンティティ：観戦者を対象とした多次元的尺度の開発」 吉田 政幸
- ⑪ 「スポーツコーチング・イノベーション研究会」 荒井 弘和
- ⑫ 「クラウドソーシング研究会」 西川 英彦
- ⑬ 「AI を用いた学習分析とその周辺に関するビジネス調査」 児玉 靖司
- ⑭ 「ESG 投資研究会」 長谷川 直哉
- ⑮ 「比較経営史研究会」 竹原 正篤
- ⑯ 「産業クラスターの知的高度化とグローバリゼーション」 洞口 治夫
- ⑰ 「プロ・スポーツチームにおける社会的影響と関与の関係について」 井上 尊寛
- ⑱ 「消費者行動とマーケティング研究会」 新倉 貴士
- ⑲ 「金融イノベーションと新しいファイナンス理論」 山崎 輝
- ⑳ 「金融市場における情報伝播とその周辺に関する統計分析」 高橋 慎
- ㉑ 「日本における新たな鉄道経営史の構築」 二階堂 行宣
- ㉒ 「組織メンバーの日常行動とイノベーション創出」 永山 晋
- ㉓ 「イノベーションプロセス研究会」 豊田 裕貴
- ㉔ AI を用いた学習分析とその周辺に関するビジネス調査 (児玉靖司)

2. シンポジウム・セミナー等

- ① 公開セミナー「一带一路構想と日本・世界の対応」
2019年6月1日 法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ② 国際セミナー「企業活動をめぐる法制度の日米比較
(Comparison of the Corporate Law between the U.S. and Japan)」
2019年6月7日 法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ③ 「G-SHOCKの世界とCASIOのDNA」(第1回法政大学MBAセミナー&進学相談会2019)【協力】
2019年7月20日 法政大学 富士見ゲート4階 G401教室、外濠校舎5~6階 S501~S503、S601~S602教室
- ④ 国際シンポジウム「想像力とマーケティング—マーケティングにおける想像力の役割とは— (Imagination and Marketing: What are the Roles of Imagination in Marketing?)」
2019年7月21日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ⑤ 出版記念シンポジウム「創発型責任経営—新しいつながりの経営モデル—」【東京会場】
2019年7月26日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ⑥ 「ブランドマーケティングの本質に迫る」(第2回法政大学MBAセミナー&進学相談会2019)【協力】
2019年10月19日 法政大学 外濠校舎3階 S306教室、5~6階 S501~S503、S601~S602教室
- ⑦ 「Organisation Level Translation of SDGs and Accounting」(2019年度第3回経営学会研究会)【協力】
2019年12月18日 法政大学 大内山校舎7階 Y702教室
- ⑧ 国際セミナー「圧縮された経済発展—英国・日本・中国の経験を比較して—」
2020年1月10日 法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ⑨ コーネル大学リテール・マネジメント・プログラム・オブ・ジャパン[第10期]【協力】
2019年度の本学開催=2019年4月17日・18日、5月15日・16日、6月12日・13日、7月24日・25日
法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5
- ⑩ コーネル大学リテール・マネジメント・プログラム・オブ・ジャパン[第11期]【協力】
2019年度の本学開催=2019年11月13日・14日、2020年1月15日・16日
法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5

3. 公開講座

「社会課題に挑んだ企業家たち」2019年11月16日、12月14日、2020年1月25日 (全3部)
法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- 1. 研究プロジェクト <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/project.html>
- 2. シンポジウム・セミナー等
<http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/symposium-2.html>
- 3. 公開講座 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/lecture.html>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2019年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

1. 学術雑誌 1冊
イノベーション・マネジメント No.17
2. 研究叢書 1冊
 - ①No.19 起業プロセスと不確実性のマネジメント
—首都圏とシリコンバレーの Web ビジネスの成長要因—
3. ワーキングペーパー
 - ①No.204 ミドル層の中途採用における「採用後マッチング」
 - ②No.205 続・栗山泰史 オーラル・ヒストリー
 - ③No.206 佐野清明 オーラル・ヒストリー
 - ④No.207 豊島達哉 オーラル・ヒストリー
 - ⑤No.208 続・有吉孝一 オーラル・ヒストリー
 - ⑥No.209 Interfirm Relationship between Automobile Firms
and Tire Firms in the U.S., 1900-1940
 - ⑦No.210 Intraregional Diversification and Individual Subsidiaries
 - ⑧No.211 A Study About What Led Japanese Pharmaceutical Industry into 20th Century
 - ⑨No.212 Evaluation Index System for Railway Hub Logistics Base
System Layout Planning, Taking Hefei Railway Hub in China as an Example
 - ⑩No.213 アフリカにおける日本企業の事例研究 I
 - ⑪No.214 アフリカにおける日本企業の事例研究 II
 - ⑫No.215 アフリカにおける日本企業の事例研究 III
 - ⑬No.216 非営利組織における予算の機能と編成プロセス
 - ⑭No.217 明治・大正期における大阪薬業界の変遷 —道修町薬業者の活動を中心として—
 - ⑮No.218 Sustainability Management Under Sumitomo: The CEOs' Decision-making Process Regarding Smoke
Pollution at the Besshi Copper Mine in Japan 1
Teigo Iba: A Pioneer of Management Aimed at Creating Shared Value (CSV)
 - ⑯No.219 Sustainability Management Under Sumitomo: The CEOs' Decision-making Process Regarding Smoke
Pollution at the Besshi Copper Mine in Japan 2
Masaya Suzuki: Management Through "Itoku-shori", Aiming for a Sustainable Society
 - ⑰No.220 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective
of SDGs and ESG 1 Magosaburo Ohara: The Pioneer of CSR Who Challenged the Realization of Labor
Idealism
 - ⑱No.221 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective
of SDGs and ESG 2 Tsurukichi Hatano: Regeneration of Community Through Innovation of Conventional
Industries
 - ⑲No.222 Sustainable Management Practices of Japanese Companies in Pre War Period from the Perspective
of SDGs and ESG 3 Kenkichi Kagami: Founder of Insurance Business in Japan
 - ⑳No.223 The Mechanism of Formation of Logistics Clusters

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

1. 学術雑誌 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html>
2. 研究叢書 <http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/publication.html>
3. ワーキング・ペーパー http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/working_paper.html

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して 2019年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2019年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2019年度の web サイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。
・多くの学会、学術雑誌等で書評・引用の対象となっていると思われるが、数は把握していない。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<p>・叢書の書評については、当センター発刊の学術雑誌で書かれている。</p> <p>①イノベーション・マネジメント No. 17 「公文溥・糸久正人 編著『アフリカの日本企業 - 日本的経営生産システムの移転可能性-』2020年3月」(評者：藤本隆宏)</p> <p>②イノベーション・マネジメント No. 17 「長谷川直哉 編著『企業家に学ぶ ESG 経営 - 不連続な社会を生き抜く経営構想力-』2020年3月」(評者：四宮正親)</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・イノベーション・マネジメント No. 17 http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html</p>
<p>④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）</p>
<p>※2019年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <p>特に第三者評価は受けていない。年5回の運営委員会を実施し適正な運営を行う。また、所員懇談会を実施する。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況</p>
<p>※2019年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び2019年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。</p> <p>・所員の科研費の応募は、定年延長者等の特段の事情を除き専任教員に要請している。2019年度に応募した2020年度の科研費の獲得は、分担者、基金、補助金を含め所員66人（専任・兼任所員46名、客員研究員20名）中40人であり、61件であった。また、民間企業からの受託研究が継続1件（富士ソフト株式会社、2019年9月1日～2020年3月31日）あった。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>当センターは、様々な研究分野を専門とした所員で構成されている。専任・兼任所員は11学部・研究科の教員から成り、幅広い分野の見解を共有できるよう積極的に取り組んでいる。また、運営委員も複数学部・キャンパスの教員に委嘱し多様な意見交換が出来るようにしている。</p> <p>研究活動は活発で、研究プロジェクト等で研究力を高め、セミナー・シンポジウム等で研究成果を公表し、学術雑誌や叢書等の定期刊行物を発行することで、外部への認知を高めている。所員に対しては、研究プロジェクト資金の助成、セミナー・シンポジウムのサポート（助成金含む）や、ワーキングペーパー発行の際の英文校閲料一部補助等、様々な研究支援体制を整えている。</p> <p>2019年度においては、グローバルな取組が目立った。学術雑誌13本中1本、ワーキングペーパー20本中10本が英文で寄稿された。また、外国人客員研究員の委嘱や外国人講師を招聘した国際セミナーも4件あった。今後も研究ニーズや社会の期待に応えられるよう、支援していく。</p>	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・特になし</p>	

【この基準の大学評価】

<p>イノベーション・マネジメント研究センターにおける2019年度の研究・教育実績は、研究プロジェクトが23件、シンポジウム・セミナーなどが10件実施され、また、全3部3日間からなる公開講座が実施された。また、対外的に発表した研究成果として、学術雑誌1冊、研究叢書1冊、ワーキングペーパー20編が発行された。2019年度は、学術雑誌13本中1本、ワーキングペーパー20本中10本が英文で寄稿され、外国人客員研究員の委嘱や外国人講師を招聘した国際セミナーも4件開催されるなど、国際的な取り組みが目立った。</p> <p>研究成果に対する社会的な評価として、貴研究センターが発行する学術雑誌において、叢書の書評が掲載されている。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

外部からの組織評価として、第三者の評価は受けていないが、年5回の運営委員会や所員懇談会が実施されており、適切な運営が行われているといえる。2020年度の科研費の獲得状況では、分担金、基金、補助金を含め所員66人中40人(61件)が獲得しており、民間企業からの受託研究(継続)も1件あった。

III 2019年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、およびワーキングペーパーの形で積極的に発信することで、学界に貢献する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。	
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員で研究チームを形成して研究プロジェクトの推進をはかる。	
	達成指標	叢書2冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数10本(研究ノートや寄稿等も含む)、ワーキングペーパー10本を目指す。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		叢書は予定していた1冊が、英文で外国の出版社から助成金なしで出版できることになり叢書の形態を取らないことにしたこと、代替の書籍も叢書の仕様と合わなかったことから1冊の発刊となった。学術雑誌に掲載する論文数は13本(研究ノートや寄稿等も含む)、ワーキングペーパー20本(うち英文10本)を発刊し、所員の研究成果を積極的に発信することができた。	
改善策	叢書2冊を刊行できるよう所員に申請を促す。また、承認後進捗状況を確認する。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	継続的な資料収集を通じて、流通産業ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、流通・消費財産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。	
	年度目標	継続的な資料収集に加え、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。	
	達成指標	これまで収集した資料・書棚の状態を確認し、適切な保管方法・配列を検討し、実行する。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		現状調査を行い、書庫のカビの状況が酷いことが分かったため、カビ除去及び発生防止事業の実施と予備費の申請を行った。10月の常務理事会で承認され、業者によるカビ除去作業を12月～3月に行った。また、当センターの特色としている社史・団体史(約8,000冊)について、コリブリ装着作業を完了させ、保管耐性を強めた。	
改善策	資料を保管している書庫はBT地下にあり、カビが発生しやすい環境にあるため、来年度以降も環境保全・発生防止事業を継続して行う。 また、資料収集・保存方針についても検討していく。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
3	中期目標	公開講演会、シンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。	
	年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。	
	達成指標	シンポジウムまたは講演会5回を目標とし、講演録やサマリーを残せるようにレベルの充実をはかる。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		シンポジウムまたは講演会を10回開催(協力含む)し、大幅な目標達成となった。そのうち外国人講師を招聘した国際セミナーも4件あった。研究成果の社会への還元と研究者同士お	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		よび研究者と実務家の交流ができた。	
	改善策	—	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
4	中期目標	公開講座や寄付講座の継続実施に向け、適切なテーマ・開催方法等を検討する。	
	年度目標	学外研究者を対象とした公開講座を実施する。寄付講座については、企画に時間を要するため、来年度（隔年）実施を目指し、準備を行う。	
	達成指標	所員の教育活動も支援できるような公開講座を実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		公開講座は1回目（10/12）が台風19号のため事前に中止の判断をしたが、振替開催を即座に決定し、予定通り全3回を実施した。本講座は2007年度から毎年実施しており、2016年度から受講料を無料としている。毎年行われる公開講座として認知度も高く、参加者からも高評価を得ている。	
改善策	—		
【重点目標】			
2019年度については、研究プロジェクトが23件と昨年度から更に5件多い。これらの研究プロジェクトが適切に活発に活動され、良い成果が出されることを目標とする。研究活動の成果として、叢書および学術雑誌、ワーキングペーパーの発刊や、シンポジウムの開催について質と量の向上をはかる。そのために、所員への周知と運営委員会での報告・改善点があれば検討することを積極的に行う。			
【年度目標達成状況総括】			
2019年度イノベーション・マネジメント研究センターとしては目標をほぼ達成し、活発な研究活動と成果の発信ができたと考える。検討・報告すべき議題が発生した際には臨時運営委員会（メール審議）も含め、速やかに運営委員会に上程し、適切に運営することができた。資料収集に関しては、カビ発生防止の観点からも何をどれだけ収集しどのように保管していくかを学術支援本部全体で検討していく必要があり、来年度以降の新たな課題となった。			
2020年度は所長、副所長および運営委員の多くが入れ替わり、新規に委嘱する所員もいるが、適切で活発な研究活動が引き続き行われるよう運営したい。			

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

イノベーション・マネジメント研究センターにおける2019年度の目標は適切に設定され、ほぼ全ての目標を達成している。特に、シンポジウムまたは講演会については10回開催され、目標の5回を大幅に上回った。そのうち外国人講師を招聘した国際セミナーも4回開催され、国際的に研究活動と成果を発信し、社会への還元、研究者同士の交流、研究者と実務家の交流が行われたことは高く評価できる。また、2007年度から毎年実施されている学外研究者を対象とした公開講座を2019年度も開催（全3回3日間）した。引き続き、活発な研究活動と積極的な発信が期待される。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	研究プロジェクトを公募し、研究のサポートを行うとともに、所員の研究成果を学術雑誌、研究叢書、およびワーキングペーパーの形で積極的に発信することで、学界に貢献する。さらに、特色あるデポジット・ライブラリーを構築し、他に類のない体系的な図書・資料をコレクション方式により重点収集、整理、公開利用を行うと共に、収集した図書・資料の活用を通じて調査・研究の向上に寄与する。
	年度目標	研究成果物の質と量の向上をはかる。所員に広く申請を促し、進捗管理を行う。
	達成指標	叢書2冊の発刊、学術雑誌に掲載する論文数10本（研究ノートや寄稿等も含む）、ワーキングペーパー10本を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	継続的な資料収集を通じて、流通産業ライブラリーの充実を図ると共に、研究者また学生への資料提供を行うことで、流通・消費財産業の研究の促進、また人材の育成に貢献する。
	年度目標	継続的な資料収集と、これらの貴重資料の適切な保管、長期的な維持を目指した取組を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	特に貴重資料を中心に資料収集を行い、配置の際には除菌を施すこととする。また資料を保管している BT 地下書庫の環境保全・発生防止事業を行う。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
3	中期目標	公開講演会、シンポジウムを開催することを通じて最新の研究成果を社会に還元する。
	年度目標	継続的な研究活動の推進につながるシリーズ講演の実行や、海外の研究機関との関係づくりに尽力する。
	達成指標	シンポジウムまたは講演会 5 回を目標とし、講演録やサマリーを残せるようにレベルの充実をはかる。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
4	中期目標	公開講座や寄付講座の継続実施に向け、適切なテーマ・開催方法等を検討する。
	年度目標	学外研究者を対象とした公開講座を実施する。
	達成指標	所員の教育活動も支援できるような公開講座を実施する。
<p>【重点目標】 研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献</p> <p>【目標を達成するための施策等】 2020 年度は所長、副所長および運営委員の多くが入れ替わり、新規に委嘱する所員もいるが、適切で活発な研究活動が行われるよう周知・運営する。 また、既存の組織・分野の枠を超えた学内外の研究者との交流により、研究を活発化させ、研究成果を広く発信する。</p>		

【2020 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

2020 年度中期目標・年度目標は、研究活動、社会貢献・社会連携ともに適切に設定されている。重点目標は「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」である。既存の組織・分野の枠を超えた学内外の研究者との交流により研究を活発化させ、叢書（2 冊）、学術雑誌（掲載論文数 10 本）、ワーキングペーパー（10 本）の発刊、シンポジウムまたは所員の教育活動も支援できるような公開講座（5 回）の開催等により、研究成果物の量と質の向上を図るとした。具体的な方策の実行が期待される。

【大学評価総評】

イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動は活発に行われている。研究・教育実績は、研究プロジェクトが 23 件、シンポジウム・セミナーなどが 10 件実施され、また、全 3 部 3 日間からなる公開講座が実施された。また、対外的に発表した研究成果は、学術雑誌 1 冊、研究叢書 1 冊、ワーキングペーパー 20 編の発行である。2019 年度は、学術雑誌、ワーキングペーパーで英文による寄稿があり、また、外国人客員研究員の委嘱や外国人講師を招聘した国際セミナーも開催されるなど、国際的な研究活動と成果が発信されたことは高く評価できる。

2020 年度中期目標・年度目標は、研究活動、社会貢献・社会連携ともに適切に設定されている。重点目標は「研究活動の推進と、研究成果の産業発展・社会貢献」であり、学術雑誌（掲載論文数 10 本）、ワーキングペーパー（10 本）の発刊、シンポジウムまたは所員の教育活動も支援できるような公開講座（5 回）の開催等により、研究成果物の量的・質的向上が期待される。

なお、外部からの組織評価として、第三者の評価は受けていないが、年 5 回の運営委員会や所員懇談会が実施されており、適切な運営が行われているといえる。今後は、他の研究所の取り組みなども参加にしつつ、更なる取り組みが期待される。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。